

令和元年6月13日現在

機関番号：13901

研究種目：基盤研究(A) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15H01888

研究課題名(和文) 古代地中海世界における知の伝達の諸形態

研究課題名(英文) Ways of Transmitting Knowledge in the Ancient Mediterranean World

研究代表者

周藤 芳幸 (Suto, Yoshiyuki)

名古屋大学・人文学研究科・教授

研究者番号：70252202

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 20,200,000円

研究成果の概要(和文)：古代地中海世界に生じた文明社会において、それぞれの個性的な文化の創造と継承、そして相互交流に果たした知の伝達形態の特徴とは、いかなるものであったのか。本研究では、哲学、歴史学、考古学、美術史学というディシプリンの壁を越えて、我が国を代表する中堅の研究者が共同し、国際的なアカデミアの第一線で活躍している研究者と連携しつつ、この問題の解明に取り組んだ。そこでは、メディアとしての口承、文字、図像をめぐる国際研究集会や講演会の開催を通じて、社会の中での共時的及び通時的な知の伝達に果たした媒体の多様な側面が明らかにされた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義は、古代地中海文明が一千年以上にわたって独自の世界を安定的に存続させることができた理由を、その構成員の間で行われていた知の伝達の独自のあり方に求め、その特性を学際的な研究によって明らかにしたことである。本研究プロジェクトによって研究期間中に開催された各種の国際研究集会、講演会、シンポジウムは、知の伝達の問題の意義を広く学界に認識させただけでなく、我が国の古代地中海文明研究のさらなる国際化と高度化に貢献したものと判断される。

研究成果の概要(英文)：One of the primary features of the ancient Mediterranean civilization is undoubtedly its remarkable resilience based on the communal solidarity of its principal members and their collective initiative in the public actions. Although many factors must have contributed to the formation of such features, efficient transmission of relevant knowledge must have been highly critical. This research project brought together Japanese scholars working on the ancient Greek and Roman history, the classical archaeology, the ancient philosophy, the art history, and Egyptology, with a view to understanding the nature of various media, such as the colloquial, the textual, and the visual ones, and clarified their intricate and effective combination that enabled the productive transmission of knowledge in the ancient Mediterranean world including Egypt.

研究分野：古代ギリシア史

キーワード：比較史 地中海 知識 伝達 メディア 口承 文字 図像

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

古代地中海文明の研究は、19世紀以来、扱う史資料の内容と形態から哲学、文学、歴史学、考古学、美術史学などの個別ディシプリンのもとで教育を受けた研究者が、基本的にはその枠の中で研究を推進することにより、相応の成果をあげてきた。確かに、本邦においては、日本西洋古典学会の70年近い活動を通じて、「古典学」のもとにこれらのディシプリンを統一的に把握する試みが続けられてきているが、依然として「哲学」、「史学」、「文学」というディシプリンの壁が、研究者の有機的な連携を妨げていることは事実である。しかし、国際的に見れば、近年では、広がりのあるテーマのもとで領域横断的なプロジェクト研究を展開することで、より多面的でニュアンスに富んだ古代地中海世界像を描き出そうとする試みが盛んになりつつある。そのような状況のもと、研究代表者は2006年に刊行した著書(『古代ギリシア 地中海への展開』京都大学学術出版会)において、識字能力と口承性、アルファベットの創造過程、彫像制作や神殿建築を介したメッセージの発信と受容の諸相について考察し、2014年に上梓した著書(『ナイル世界のヘレニズム エジプトとギリシアの遭遇』名古屋大学出版会)でも、ヘレニズム時代のエジプト在地社会の文化変容に関して、公的碑文やモニュメントを媒体とする知の伝達がいかに大きな社会的役割を果たしていたのかという点について詳論した。その過程では、古代地中海世界における知の伝達という重要な問題を解明していくためには、歴史学だけではなく、哲学、美術史学、エジプト学などの隣接分野の専門家の叡智の組織的な結集と、継続的な共同研究が必要であることを痛感するようになった。

2. 研究の目的

本研究が解明を試みるのは、古代地中海世界に生じた文明社会(王朝時代のエジプト、古典期のギリシア、ヘレニズム時代の東地中海、ローマ帝国支配下の地中海)において、それぞれの個性的な文化の創造と継承、そして相互交流に貢献したと考えられる知の伝達形態の特徴がいかなるものであったのか、とりわけそれらを構成する各種のメディア(主として口承、文字、図像)それらが発現するモード(朗唱、対話、弁論、裁判、儀礼、統治、戦争、生産、彫像建立、建築など)及びそれらの空間的なコンテクスト(都市、劇場、裁判所、聖域、神殿、領域など)が相互にどのような関係を取り結び、いかなる原理によって複合されることで創造的な知の伝達を実現していたのか、という問題である。しばしば古代地中海世界の研究は、伝統的に古典学という特殊な価値判断を内包する傘のもとにあったことから、他の文明社会に対する研究と共有することができるような問題系の提出には消極的であると批判されてきた。本研究では、このような批判を克服するためにも、研究期間内において、当該社会における知の伝達の諸形態とその相互作用を明らかにするだけでなく、他の文明社会における知の伝達の諸形態との比較研究を可能とする論点を確定する。その成果については、最終年度に予定されている第4回古代地中海世界日欧コロキウムで国際的な視野から検討した後、さらに総合的なプロジェクトへと発展させる。

3. 研究の方法

本研究においては、横軸として口承、文字、図像という3つのメディアの範疇を、また、縦軸としてギリシア、エジプト、ヘレニズム、ローマという4つの時空間を設定することによって形成されるマトリクスに、連携研究者を含めて計12名の研究者が重層的に所属する形態をとって共同研究を進める。このような組織を立てることによって、本研究組織のメンバーはそれぞれ複数の領域を越境しつつ各年度の研究課題に取り組むことになる。人文学の分野における共同研究の成否は、ひとえに独創的な個人研究への専心と専門を異にする研究者との開かれた対話を通じた創発が並存する研究条件を実現することにかかっている。そのため、本研究組織においても、メンバーそれぞれの研究関心に基づく国内外での単独もしくは共同調査・研究活動を尊重しながらも、このマトリクスに基づく研究会をと海外から研究者を招いて開催する講演会や研究会を開催することによって、研究目的の達成をはかる。

4. 研究成果

初年度には、6月と9月に研究会を行い、古代地中海世界における知の伝達を解明していく上で、各自がどのような課題に取り組むのかを明確にした。また、11月には、本プロジェクトによる初の国際研究集会として、イェール大学のJ.マニング、ジョンズ・ホプキンス大学のR.ジャスノウ教授らとともに、「末期王朝・プトレマイオス朝エジプトにおけるテキストと社会」を開催し、エジプト固有のメディアであるパピルス文書の特性を知の伝達という視点から再検討した。また、8月には周藤と高橋がエジプトで現地調査を行い、採石場の操業プロセスについて、多大な知見を得た。これらの共同研究に加えて、初年度には周藤がベルリン自由大学で、長田がアメリカ考古学会で研究発表を行い、大林がUCLで資料調査を行うなど、国際的な活動を行った。

古代地中海世界における「知の強化と増幅」の解明を共通課題に設定した2年目も、6月と9月に研究会を行った他、11月には藤井が中心になって国際研究集会「市場からアソシエーションへ」を開催し、Ch.タブリン、オークランド大学のM.トランドルらと共同研究を行うことによって、傭兵のモビリティを通じた知の伝達というこれまで本研究グループの視野にはなかった課題を浮かび上がらせることができた。また、11月にはウィーン大学のM.マイヤー教授、2

月にはイオニア大学のV.ヴァイオプロス教授の講演会を開催し、とりわけレリーフ碑文などの研究を通じて本研究課題と共通する研究を美術史の分野で推進してきたマイヤー教授からは、本プロジェクトの展開について貴重な示唆を得ることができた。

「知の継承とカノン化」を共通課題とした3年目には、これまで研究成果の一部を学界に問うために、日本西洋史学会第67回大会において、小シンポジウム「古代地中海世界における知の伝達の諸形態 - 口承・文字・図像」を挙行政した。そこでは、公的弁論におけるレトリック、公文書と公的碑文、奉納碑と墓碑銘、ローマ時代の皇帝像などを具体的な分析対象として、それらがいかに相互に深く関連しながら知の継承とカノン化に貢献していたのかが論じられた。また、国際研究集会としては、10月にベルリン自由大学の研究グループを招聘して「古代エジプト世界における宗教儀礼の斉一性と地域性」を開催した他、オスロ大学のO.ラッバス教授、モンリオール大学のJ.ペロー教授、コペンハーゲン大学のV.ガヴリエルセン教授による講演会を開催し、これらの研究交流を通じて、古代地中海世界における知の伝達のさらなる解明のためには「文化的記憶」の概念を導入することが有効であろうという見通しを得ることができた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計34件)

金山弥平、Plato's Dream、Journal of Humanities, Nagoya University、査読無、Vol.1、2018、pp.147-152

周藤芳幸、古代ギリシアにおける知の伝達、HERITEX、査読無、Vol.2、2017、pp.86-98

周藤芳幸、ヘレニズム時代東地中海のワイン交易 - エジプトからの視点、西アジア考古学、査読有、2016、Vol.17、pp.59-66

KANAYAMA, Yahei、Recollecting, Retelling, and Melete in Plato's Symposium: A New Reading of *he synousia tokos estin* (206C 5-6)、International Plato Studies、査読有、Vol.35、2016、pp.249-256

佐藤昇、前4世紀アテーナイの法廷と修辞、西洋史研究、査読有、Vol.45、2016、pp.126-137

田中創、「背教者」ユリアヌス - 皇帝書簡と伝承、歴史学研究、査読有、Vol.951、2016、pp.12-27

OSADA, Toshihiro、Unsichtbare Goetter: Darstellung der Intervention der Gottheit in fruehklassischer Zeit、IKARUS、査読有、Vol.9、2016、275-284

〔学会発表〕(計36件)

SATO, Noboru、Additional Information in Witness Testimonies, Second International Conference on Drama and Oratory, Kalamata, 2017

OSADA, Toshihiro、Ist der Parthenonfries sinnbildlicher Ausdruck des athenischen Imperialismus?, 16. Oesterreichischer Archaeologentag, Wien, 2016

MOROO, Akiko、Barbaroi in Attic (and Greek) Inscriptions, Oxford Epigraphy Workshop, 2015

SUTO, Yoshiyuki、Text and Society in Egypt in Late and Ptolemaic Periods, Nagoya University Center for Cultural Heritage and Texts International Workshop, 2015

〔図書〕(計13件)

芳賀京子・芳賀満、中央公論新社、『西洋美術の歴史(1)古代 - ギリシアとローマ、美の曙光』、2017、656

浦野聡、上野慎也、師尾晶子、イアン・ラザフォード、竹尾美里、中川亜紀、藤井崇、田中創、奈良澤由美、勉誠出版、『古代地中海の聖域と社会』、2017、448

OSADA, Toshihiro (ed.)、Phoibos Verlag, The Parthenon Frieze: The Ritual Communication between the Goddess and the Polis, 2016、175

金山弥平、岩波書店、J.アナス・J.バーンズ『古代懷疑主義入門 - 判断保留の十の方式』、2015、530

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：金山 弥平
ローマ字氏名：KANAYAMA, Yahei
所属研究機関名：名古屋大学
部局名：人文学研究科
職名：教授
研究者番号(8桁)：00192542

研究分担者氏名：長田 年弘
ローマ字氏名：OSADA, Toshihiro
所属研究機関名：筑波大学
部局名：芸術系
職名：教授
研究者番号(8桁)：10294472

研究分担者氏名：師尾 晶子
ローマ字氏名：MOROO, Akiko
所属研究機関名：千葉商科大学
部局名：商経学部
職名：教授
研究者番号(8桁)：10296329

研究分担者氏名：高橋 亮介
ローマ字氏名：TAKAHASHI, Ryosuke
所属研究機関名：首都大学東京
部局名：人文科学研究科
職名：准教授
研究者番号(8桁)：10708647

研究分担者氏名：佐藤 昇
ローマ字氏名：SATO, Noboru
所属研究機関名：神戸大学
部局名：人文学研究科
職名：准教授
研究者番号(8桁)：50548667

研究分担者氏名：大林 京子
ローマ字氏名：Oobayashi, Kyoko
所属研究機関名：東海大学
部局名：文学部
職名：准教授
研究者番号(8桁)：50594157

研究分担者氏名：田中 創
ローマ字氏名：TANAKA, Hajime
所属研究機関名：東京大学
部局名：総合文化研究科

職名：准教授

研究者番号（8桁）：50647906

研究分担者氏名：藤井 崇

ローマ字氏名：FUJII, Takashi

所属研究機関名：関西学院大学

部局名：文学部

職名：准教授

研究者番号（8桁）：50708683

研究分担者氏名：芳賀 京子

ローマ字氏名：HAGA, Kyoko

所属研究機関名：東北大学

部局名：文学研究科

職名：准教授

研究者番号（8桁）：80421840

研究分担者氏名：中野 智章

ローマ字氏名：NAKAN0, Tomoaki

所属研究機関名：中部大学

部局名：国際関係学部

職名：教授

研究者番号（8桁）：90469627

(2)研究協力者

研究協力者氏名：桜井 万里子

ローマ字氏名：SAKURAI, Mariko

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。